

# ブラームスの《交響曲第1番》の創作過程に関する考察 ——現存資料に関する研究

A Study on the Composing Process of Brahms' Symphony No.1

—Research on the Extant Materials of this Work

西原 稔

Minoru Nishihara

本論文は、ブラームスの《交響曲第1番》をとくに作品の成立に関する資料を中心に考察することを目的とする。ブラームス研究における最大の課題は、残されているスケッチ類の資料がきわめて乏しい点にある。それは彼が創作過程を示すスケッチ類をことごとく破棄および廃棄したためである。しかし、書簡や演奏資料、出版社に保管された浄書などを通して、この作品の創作過程を解明することはある程度、可能である。本論文は残された資料をもとにこの作品の成立過程を資料を通して考察した論考である。

## 第1章 《交響曲第1番》の創作過程

### 1 交響曲創作の構想

ブラームスの「交響曲第1番」は、非常に謎の多い作品である。創作開始から21年の年月を経て完成した作品と述べられることが多いが、この作品は21年間を要して完成されたわけではない。最初の構想から、本格的な作曲に取り掛かるまでに非常に長い空白期間があり、この空白期間に完成されたのが《ドイツ・レクイエム》である。ブラームスの創作の歩みのなかで、1869年に完成初演された《ドイツ・レクイエム》と1876年に完成された《交響曲第1番》は彼の創作のいわば分水嶺といっても過言ではない。ドイツ・バロックの宗教音楽やバロック時代の作曲手法を、ブラームスの表現によっていわば総括したのが《ドイツ・レクイエム》であった。

《ドイツ・レクイエム》がその後の4曲の交響曲の創作とどのような結びつきをもったのかは、ブラームス理解においてきわめて重要である。1855年頃から、ルネサンスやバロック音楽研究を土台にして創作された一連の宗教合唱作品や対位的な書法の作品の一つの系列と、同じ1850年代前期から、ベートーヴェンやバッハ、シューベルト、シューマン、メンデルスゾーンらの作品を土台に創作を始めた器楽